高山　開治郎　―桜並木を後世に―

「なんて美しい桜なんだろう。」

蔵王の山々をはるかに望み、白石川沿いに咲きほこる桜の前で多くの人々が感嘆の声をあげ、カメラのシャッターを切る音があちらこちらから聞こえてきます。

仙台から南へ約三十キロメートル。大河原町の中心部を白石川がとうとうと流れます。両岸の堤防には約八キロメートルにわたって桜並木が続きます。毎年、桜の季節になると県の内外からおおぜいの観光客が訪れ、「一目千本桜」の名で東北地方でも有数の桜の名所となっています。

この桜並木は、ある一人の人物の壮大な夢の結晶なのです。その名は高山開治郎。かれは、明治九（一八七六）年四月、江戸時代から続く由緒ある旅館の長男として大河原の地に生まれました。しかし、開治郎が十五歳のとき、父親が亡くなりました。そして、家業の旅館も廃業しなければならなくなりました。まだ若かった開治郎にはどうすることもできませんでした。

明治二十四（一八九一）年、開治郎は十五歳でふるさとをはなれて東京に働きに出ました。これまで何不自由なく暮らしていた開治郎にとって、身よりもなく朝から晩まで住みこみで下働きをする日々はとてもつらく厳しいものでした。いく度となくふるさとの宮城に帰ることを夢見ました。幼なじみの笑顔や生まれ育った大河原の町並み、残雪をいただいた雄大な蔵王連峰、清らかな流れの白石川。いつも思いうかぶのはなつかしいふるさとの景色でした。

白石川の桜並木（大河原町）

（みんなはどうしているだろうか）

しかし、当時、大河原に帰るのは蒸気機関車を乗りついでも二日がかりの長旅です。そんな休みなどを取れるわけがありません。そして何よりも高い切符代をはらうゆとりなど開治郎にはあるはずもありませんでした。

（いつか必ず胸をはってふるさとに帰るぞ。それまでのしんぼうだ）

開治郎は、来る日も来る日も働き、商売の仕方を身につけました。店の仕事が終わると寝る間もおしんで勉学にはげみました。そして苦難の末に会社をおこして成功を収めたのでした。

そのころ、東北地方はたびたび冷害や水害におそわれていました。農民は米の不作に悩み、仙台や福島では米の値上がりに反対して「米騒動」といわれる暴動も起きていました。新聞や手紙で伝え聞くそれらの知らせに、開治郎はもどかしく感じるのでした。

（東京ではこんな豊かな暮らしをしているのに……。何か自分にできることはないだろうか）

高山開治郎

開治郎は日々の忙しさに追われながらも、ふるさとの人々の暮らしがとても気がかりでした。大河原をはなれること三十数年。東京で開治郎は新聞社を始めたり画商をしたりと手広く事業を進め、立派な実業家として広く知られるようになりました。しかし、いつも心は宮城に、大河原にありました。開治郎はひとりふるさとの方角の空をじっと見つめるのでした。

そんなとき、以前から進められていた白石川の改修工事が完成するとの知らせが届きました。

米騒動…米の値段が高くなり、生活に苦しむ人々が米を安くするよう要求して米屋などをおそった事件。

実業家…会社などをつくり経営をする人。

これまで白石川はたびたび氾濫し、そのたびに田畑は流され、家々も大きな被害を受けていました。六年間にもわたる大工事の末、川幅は広げられ堤防が築かれ、水害の心配はなくなったのでした。

「今こそ恩返しをするときだ。しかし、食べ物やお金を寄付したのではすぐになくなってしまう。何かもっと心に残るものを、みんながずっと喜んでくれるものをおくりたい。」

開治郎が住んでいた東京の屋敷の近くには、とても見事な桜並木があり、地域の人々のいこいの場所になっていました。花見の季節には多くの人々が行きかい、笑顔で満ちあふれていました。夏は強い日差しをさえぎり、木かげで楽しむこともできました。人々の暮らしの中にはいつも桜並木がありました。

植樹された桜の若木（大河原町）

「これだ。今わたしにできることは。」

目の前がぱっと明るくなったような気がしました。

大正十二（一九二三）年、四十七歳の開治郎は白石川沿いの桜並木を夢見て、七百本の桜の苗木をおくることにしました。開治郎は東京から二人の植木職人を連れ、地元の職人たちといっしょに現在の大河原町から柴田町の船岡にかけて白石川沿いに植樹しました。そして、桜の苗木が根づいたのを確かめて、昭和二（一九二七）年にも、さらに五百本の苗木を植樹しました。そのときには、柴田農林学校（現在の柴田農林高等学校）の生徒もいっしょに奉仕作業を行いました。

開治郎は、一生懸命若木を植樹する生徒たちを見つめました。

植樹…木を植えること。

こうして、ふるさとを思う一心で、合計千二百本もの桜の苗木を植えたのです。当時のお金で四千円あまりのお金を、町のために差し出したのでした。昭和八（一九三三）年、町は、その栄誉をたたえて、白石川のほとりに「桜樹碑」を建てました。

昭和十七（一九四二）年、開治郎は六十六歳でこの世を去りました。その後、日本は大きな戦争に敗れ、世の中は混乱し、人々は貧しさに苦しんでいました。しかし、人々はふるさとの復興のために努力し立ち直り、見事に発展をとげました。その間も桜は毎年咲き続け、人々に希望と笑顔をあたえてくれたのです。

桜（ソメイヨシノ）の寿命は約六十年から七十年といわれています。しかし、約九十年たった今も、開治郎の志を受けついだ地域の人々の手によって桜の世話や新たな植樹が続けられ、毎年きれいな桜を咲かせています。宮城県を代表する桜の名所として東北の「桜切手」にも描かれるまでになりました。

今も人々の心に、開治郎の思いが咲き続けています。

桜樹碑

高山 開治郎

高山 開治郎は、明治九（一八七六）年、現在の大河原町に生まれた。十五歳でふるさとをはなれた開治郎は、東京で実業家として成功を収めた。開治郎は、ふるさと大河原町の白石川沿いに、多くの桜の苗木を植樹した。この桜は、「一目千本桜」として愛され、現在も大切にされている。

当時のお金の四千円…
当時（大正十年）の大卒初任給が五十円、今の約二千万円ほど。

栄誉……
めいよ。すぐれたものとして認められほめたたえられること。